

1 - 2 次世代スギ精英樹の種苗増産・安定供給技術の開発

(県単：H28～30)

蛭子 雄太

目的

本県の森林の多くが主伐期を迎え、今後は伐採面積の増加が見込まれていることから、伐採跡地へ再造林が必要となってきた。

一方、本試験場では、昭和40年代より次世代スギ精英樹の選抜を進め、平成26年までに、初期生長が早い・材の強度が強い・少花粉・挿し木が容易といった現在のニーズに沿った4つの特性をもつ6品種を選抜した。これらの品種は、初期生長に優れているため、低コスト造林に有用であり、短期での循環生産が可能となることから、早期に普及させることが必要である。

以上のことから、増加傾向にある伐採量に対応した次世代スギ精英樹の種苗確保のために、採穂台木の増産および採穂台木の早期育成が必要である。また、従来の品種よりも初期生長の早い次世代スギ精英樹に適した種苗生産効率の高い方法の確立が必要である。

そこで、本課題では、次世代スギ精英樹の採穂台木の増産および台木あたりの採穂可能数の向上によって、挿し木苗の増産・安定供給を実現するとともに、挿し木苗の品質安定を図ることを目的とする。

採穂台木の早期育成

1 試験の概要

植栽1年目の採穂台木を対象に、基肥に加えて液肥を行うことの有効性を検討した。試験の概要は表-1のとおりである。

表-1 試験区の概要

区画	施肥方法
I	基肥(ウッドエース4号6粒(約90g)のみ)
II	基肥 + 液肥(育ちくん1,000倍希釈、週1回)
III	基肥 + 液肥(育ちくん1,000倍希釈、週1回) +フルボ酸(フジミン500倍希釈、2週間に1回)

2 試験の方法

平成 28 年 4 月の植栽後、平成 29 年 2 月に生育調査を行い、苗高、根元径を測定した。

3 結果と考察

結果を表 - 2 に示す。

表 - 2 生育調査結果

区分	苗高(cm)		苗高成長量(cm)	根元径(mm)		根元径成長量
	平成28年4月 (植栽時)	平成29年2月		平成28年4月 (植栽時)	平成29年2月	
I	43.2 ±15.3	101.6 ±23.0	57.2 ±15.7	6.34 ±1.84	13.96 ±4.92	7.49 ±3.90
II	42.4 ±14.2	99.7 ±31.9	57.9 ±22.1	6.13 ±1.43	13.14 ±4.59	7.10 ±3.95
III	42.1 ±13.6	93.8 ±27.7	51.8 ±24.2	6.60 ±1.92	13.40 ±4.98	6.80 ±3.82

施肥方法 ~ いずれの方法でも苗高及び根元径の成長に有意な差はみられず、採穂台木 1 年目の成長には基肥のみで十分であるということがわかった。

採穂サイズの検討

1 試験の概要

より多くの穂木を早期に得るために、通常(20cm)より小さいサイズ(10cm、5cm)の穂木での挿し木苗の発根率及び育苗期間を調査する。

2 試験の方法

平成 28 年 11 月に次世代スギ精英樹のうち、B-74、B-16、脊振 F₁1-15、太良 F₁8-2、大町 F₁20-4 について次代検定林から採穂した穂木による挿し木試験を開始した。挿し付けから約 6 ヶ月後の平成 29 年 5~6 月に穂木サイズごとの発根率を調査し、発根した個体については、苗畑もしくは M スターコンテナに移植し、規格に達するまでの育苗期間と得苗率を算出する予定である。



写真 - 1 穂長 20cm (左), 10cm (中), 5cm (右) の挿し床